

遺伝子組み換え（GM）作物の栽培面積の約9割が除草剤耐性作物である。とくにGM大豆とGMナタネは、ほぼすべてこの性質を持たせている。しかし除草剤を使用するうち、雑草が除草剤に抵抗を持ってしまうため、使用する除草剤の種類も量も増えていく。

米国では、これまでの除草剤ラウンドアップ耐性からジカンバ耐性大豆が増えており、日本に輸入される大豆でも増大している。この種子の商品名は「エックスステンド」という。「エックスステンド」はこの3年間、栽培割合が増加して、昨年は米国内での大豆生産の60、75%を占めるまでになった。しかも今年に入り、米国では中西部を中心にさらに購入する動きが強まっている。

## ラウンドアップからジカンバへ

ジカンバ耐性大豆が増加している最大の原因に、この数年間、ジカンバの散布で周囲の作物（大豆）が枯れる被害が生じたことがあげられている。ラウンドアップ耐性だと枯れてしまうため、ジカンバ耐性に切り替えることで、被害を免れようとする動きが農家の間で強まっているようだ。

ジカンバはモンサント社（現バイエル社）が開発した除草剤で、



# ジカンバ耐性大豆が米国の農地を席卷中 新たなGM大豆の栽培も始まる

特定の除草剤に耐性を持たせ、枯れなくした除草剤耐性GM大豆。これまでのラウンドアップにかわり、最近ではジカンバという除草剤に耐性を持たせた大豆が主流で、農業や健康への被害が甚大です。

## 天笠 啓祐

植物ホルモンに似た働きを行なうことで植物の細胞分裂を阻害して生育を抑制し、殺草効果をもたらす。ジカンバ耐性大豆が栽培されるジカンバの散布が広がると、さまざまな作物で枯れる被害が拡大し始めた。

とくに2017年は、大変な被害をもたらした。ミズーリ大学の研究者ケビン・ブラッドリーの調査によると、その被害はアーカンソー州85万エーカー（約34万4000ヘクタール）、ミズーリ、イリノイ州でそれぞれ30万エーカー（約12万1400ヘクタール）、その他の州の被害を加えると250万エーカー（約100万ヘクタール）に達し、昨年も100万エーカー（約40万4600ヘクタール）で被害が起きたという。が、その後の調査で、2年間で500万エーカー（約202万3400ヘクタール）に達したという報告もあり、被害の規模は特定されていない。

最も被害を受けたのは、ジカンバ耐性大豆以外を栽培する大豆農家だ。モンサント社に対して損害賠償を求めた裁判を起こした22州の農家の被害には、トマト、スイカ、メロン、ブドウ、カボチャ、有機野菜、住宅の庭や樹木なども含まれている。中には3万4000本の桃の木が失われたという報

告もある。

ジカンバが被害を拡大させた原因の一つに、この農薬を構成するすべての物質に揮発性があることがあげられている。アーカンソー大学の研究者は、揮発の度合いに差はあるものの、すべての物質が使用後36時間は揮発し続け、大気中を移動している、と指摘している。ジカンバによる被害は2019年も繰り返されるだろうと、複数の専門家が予測している。

## ジカンバを規制どころか承認

この被害の拡大を受けて、いったんはジカンバの規制を行なうことを検討していたEPA（環境保護庁）が、いくつかの条件を加え2年間の使用を承認した。

加えられた条件は、絶滅危惧種がいる場合には緩衝地帯を設けること、噴霧できる日数を制限することなどである。市民団体の「生物多様性センター」は、これでは米国で大事にされている蝶のオオカバマダラのような絶滅危惧種は保護できない、と述べている。同センターによると、この2年間で同蝶が80%を超えて減少しており、もはや絶滅寸前だと述べている。また環境保護に取り組む報道ネットワークは、ハチの大量死が起きていると、EPAに対して警